

Title	レンネル島における漁撈活動(上)
Sub Title	Fishing activities of the Rennellese people, Solomon Islands (I)
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.597- 625
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	考古民族・地理 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0601

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

レンネル島における漁撈活動 (上)

近 森 正

- I 序
 - II 島と住民
 - III 気候と季節
 - IV 沿岸の微地形配列と民俗分類
 - V 魚種の民俗分類
 - VI 漁撈活動
 - VII 漁法の時空間配置
 - VIII 漁期と労働配分
- (以下次号)

I 序

「サンゴ礁はすべての生物群集中、生物学的にもっとも生産的で、分類学的な多様性に富み、かつ、もっとも美しい。」(ODUM, E. P. 1971)——サンゴ礁は生物群集自体が形成したベースによって支えられる、高度に完成した生態系である。この生態系にヒトがどのようににかかわり、干渉を加えてきたかという問題については、いくつかのアプローチが考えられるが、そのひとつは考古学的手法によって資料を収集し、人間による環境開発の過程(コロナイゼーション)を分析する

レンネル島における漁撈活動 (上)

ことである。(近森「レンネル島における環境開発過程—考古学的検証の可能性について—」『東南アジア・インドの社会と文化—山本達郎博士古稀記念論文集』所収 山川出版社一九八〇) われわれの考古学的発掘調査によれば、レンネルにおける最も早い人間の居住は一四〇B・C (2090±105B. P.) にさかのぼる。そしてその生活様式は、出土した貝製の単式釣針やその製作具、伴出した魚骨、貝類などにみられるように、よく海洋環境に適応したものであることが明らかになつた。しかしながら、いまわれわれがその適応の行動システムを理解しようとするとき、考古学的資料の与える情報は、あまりにも乏しい。考古学的データに反映された人間行動の痕跡が、いかなる自然的、文化的サブ・システムの連節にもとづくかを読みとるためには、民族誌的モデルが最も有効な解釈の規準を与えるであろう。

本稿では沿岸生態系に展開される漁撈活動に関する民族誌的情報をまとめ、検討を加える。農耕および狩猟採集活動に関する考察とあわせて、レンネル島におけるエスノ・アーケオロジー研究の一助とする。

Ⅱ 島と住民

レンネル島は珊瑚海の北側、南緯一度四〇分、東経一六〇度二〇分に位置し、北西から南東方向に約八〇km巾約一〇kmの典型的な隆起(離水)環礁である。(図1)島の周囲を標高一〇〇〜一八〇mの丘陵がとり巻き、古い礁湖である内陸部には小さな起伏をもつ盆地をつくりだしている。その東部約三分の一は半鹹の *Tengano* 湖によって占められている。丘陵は硬質石灰岩よりなり、外側は四〜六段のテラスを作りながら、急峻な崖になって海岸線に接している。限られた場所では、その崖の下にせまい低地が開け、そこが島民の漁撈活動のキャンプ地になっている。内陸の盆地は、ほとんど軟質または砂質石灰岩によって形成され、石灰岩の窪地(ドリーネ)に土壌を堆積している。土壌は石灰岩の風化分解物である赤色土の上に薄い腐蝕土が覆っている。このいわゆる「土壌ポケット」の面積は小さきまままで、島軸線に沿って濃密に分布している。島民が農耕地や居住地としているのはこの内陸の土壌ポケットである。島民はそこを「島の胴」*tino*

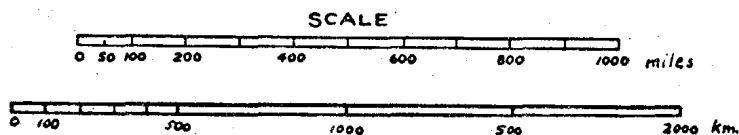
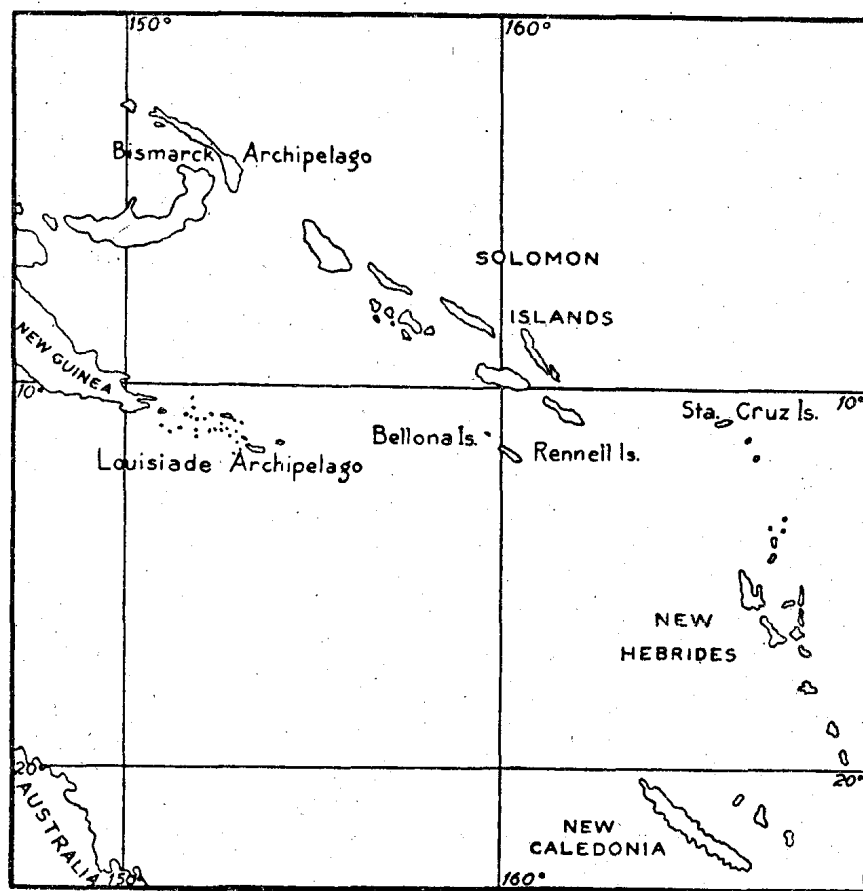


図1 レンネル島周辺地図

henua と呼び、外側を囲む丘陵地 ogo'eha と区別する。島民の主要な生活舞台はこの「島の胴」である。

人口一、二五人（一九七五年）の島民は、ここで焼畑農耕を営み、主要な生計をたてる。ヤム、タロ、サツマイモ、バナナを中心とした作物を栽培する。島民の用水はきわめて限られている。年間平均約三、〇〇〇mm以上の降雨量がありながら、雨水は多孔質の石灰岩によって、ただちに地下に吸収され、地表水に乏しい。用水としては、ドリーネの洞穴から得られる地下水を利用するが、その分布は限定的である。

人、ことに環礁の住民に比べて、かならずしも活発であるとは言えない。内陸に居住する住民は、平均一時間半から二時間の徒歩で、丘陵を越えて急峻な崖を下り、海岸に出なければならぬ。カヌーを上げることのできる海岸低地は限られており、かつ狭い。しかし海産物が島民にとって、最も効率の高い動物蛋白質の供給源であることはいままでもない。内陸の土壌ポケットの開発とともに、沿岸部にも、すぐれた海洋開発の手段をみることができ。

（レンネル語では漁撈に相当する語彙は見出せないが、あらゆる種類の採集、魚とり、わな掛け、網によるハトの捕

獲、ヤシガニの捕獲、銚り突きなどを総称して、*haiba*と呼び、焼畑での作物栽培と区別している。おそらく野生のものから食料を抽出するという意味であろう。

Ⅲ 気候と季節

「夜の天空に *Mata(n)giki* の星 (スバル) や *To(n)gu(n)ga Maui* (オリオンの三ツ星) が昇るようになると、*To-ke(n)gau* (西風) が吹きはじめ、強い風の季節になる。時々 *hu(n)gi ke(n)ge* (サイクロン) が襲ってくる。しかし夜空に *Kaukupe(n)ge* (南十字星) や *Tetoki* (南の三角座) がかかるころになると、穏やかな *tonga tu'u* (東南風) が吹くようになり、この時にヤムを収穫する。」—島民は季節の変化をこう説明する。

レンネル島の気候は一年を通じて高温多湿で、日昼の年間平均気温は三〇度をこえ、年間三、〇〇〇〜四、〇〇〇mmの降雨量がある。季節の変化には乏しいが、そこに暮す人々は微妙な自然の動きを注意深く読みとっている。

レンネル島は東南貿易風の地帯に属し、四月から十一月の終りまでは安定した東ないし東南の風が吹く。すなわち四月から十一月の終りまでの期間のSE風は平均三八%、Eは三〇%、合計六八%に達し、風力は三から四の間である。(1953

-54. *Pilot Chart of the U.S. Hydrographic Office*) これに対して十二月から三月にかけては、北西と西風が吹く。

その割合はNW風一二%、W風一二%で合計二四%であるが、ほとんどは風力七の強風である。この期間に破壊的なサイクロンが多発する。われわれも一九七四年二月三日から六日にかけて北西から南南東に抜けるサイクロンに遭遇した。一年のうちで人々が好むのは、むろん風向と風力の安定した東寄りの貿易風の吹く季節である。この期間は、雨も少なく比較的乾燥した季節でもあるので、その前半には焼畑の火入れをおこない、ヤムを植付ける。後半九月から十二月ごろまでは潮流に乗って寄ってくるトビウオの漁がおこなわれる。興味深いことに島軸がほぼ北西から東南方向に沿っているため、島の人々は、東南方向に向かって左まわりに風向を移す風 (*(n)gibu hakasema*) と右まわりに動く風 (*(n)gibu haka-*

maui)とを区別する。右つまり南に寄るほど冷たい空気が流れこむ。これはトビウオ漁に微妙に関係するといふ。

島民もまた、われわれと同様、予測できない日々の天候条件の中に暮している。毎日の不測の事態に統一的理解を与え、るものが宗教的・神話的説明に他ならない。風向はすべてその方角の上天 (tu'a'a(n)ga(n)gi) に住まう神々と関連づけられている。例えば東南東の風は最高神 Tehainga 'atua 神の住む Manukatuu に、南東の風は Tehu'ai(n)gabe(n)ga 神の居所 nukuhenua にそれぞれ属している。(その他北西の風は Ekeitehua 神、北北西の風は Ngautinihenua、北東

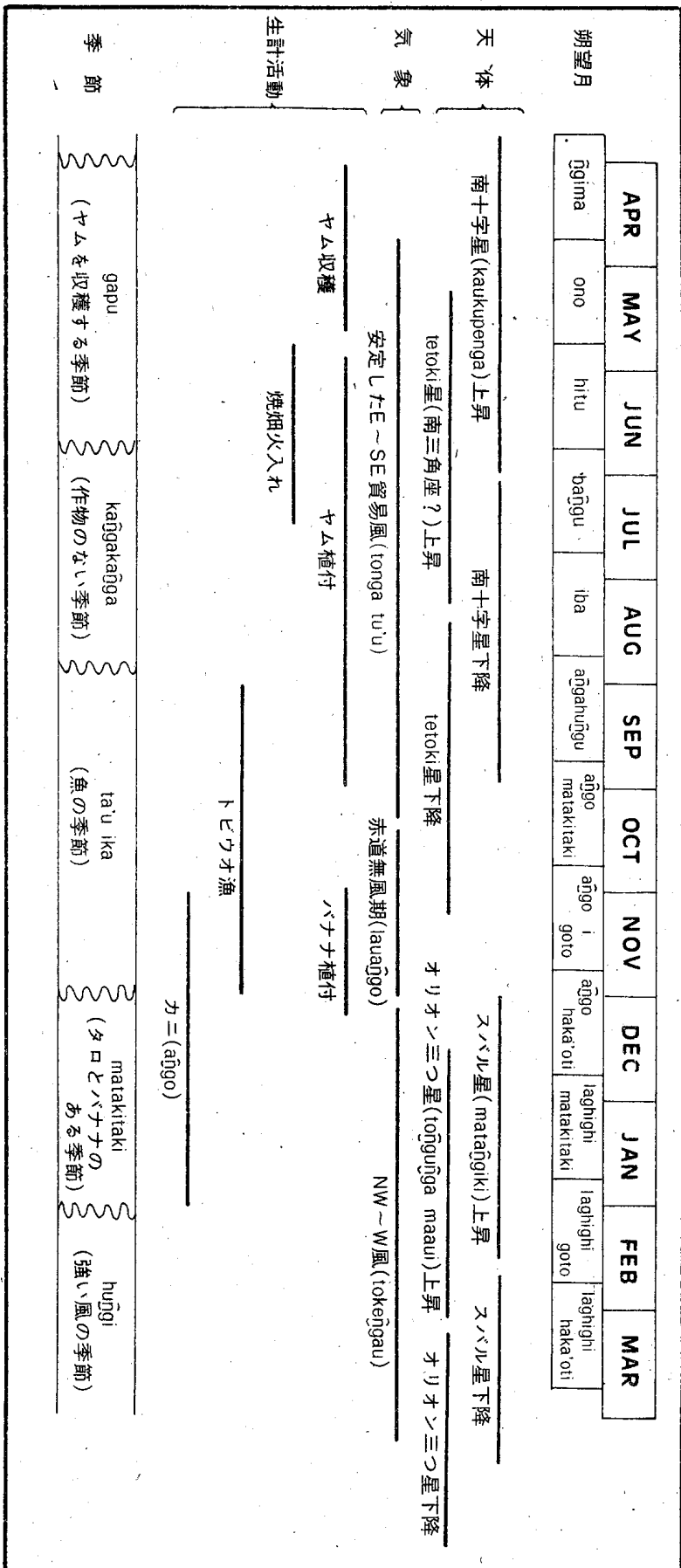


図2 気候と季節

レンネル島における漁撈活動

(上)

風は *Tu'ukiteika*、南西風は *Hu'aiteko(n)go*、西風は *Tupuimatangi* に属している。)

曆は図2に示したように新月から次の新月までをひと月とする朔望月によっている。いうまでもなくそれは季節とは明確には対応しない。朔望月二九・五三日による一年三五四・三六日と太陽年との修正をどうおこなうかについてはまだ明らかになっていない。

IV 沿岸の微地形配列と民俗分類

レンネル島を空から見おろすと、島の周囲には、せまいリーフがとり巻いている。そこに砕ける波濤が、コバルト・ブルーの外洋とシルリアン・ブルーの礁湖の間に純白のフリルをくりひろげ、潮騒を響びかせている。ラグーンの水面には、海底の地形が縞や斑点の模様映えている。

サンゴ礁の沿岸生態系はきわめて複雑である。海岸から沖に向って、あたかも帯を重ねていくように、地形が移り、動植物相が変化する。島に住む人々が、それらをどのように認識し、区分しているかを知ることによって、彼らが生活場所として、そこをどのように利用しているかを理解することができるであろう。島の南岸 *Kanggava* 湾に面する地域を中心に記載をすすめる。

島民による海岸地形の分類と名称は次の如くである。(図3)

(1) *Tu(n)gi (n)ge(n)ge*

隆起崖の外側斜面。島の内陸部は造礁石灰岩から成る丘陵によってとり囲まれているが、外側の斜面はきり立った、高さ七〇〜八〇mの崖をなしている。したがって海側から内陸部にある村落を訪れるためには、海岸のどこからでも、この崖をよじ登らなければならない。海岸低地 (*abatari, apata*) をもたない個所では急崖が直接、海面に接している。

(2) *'a(n)go tu'u*

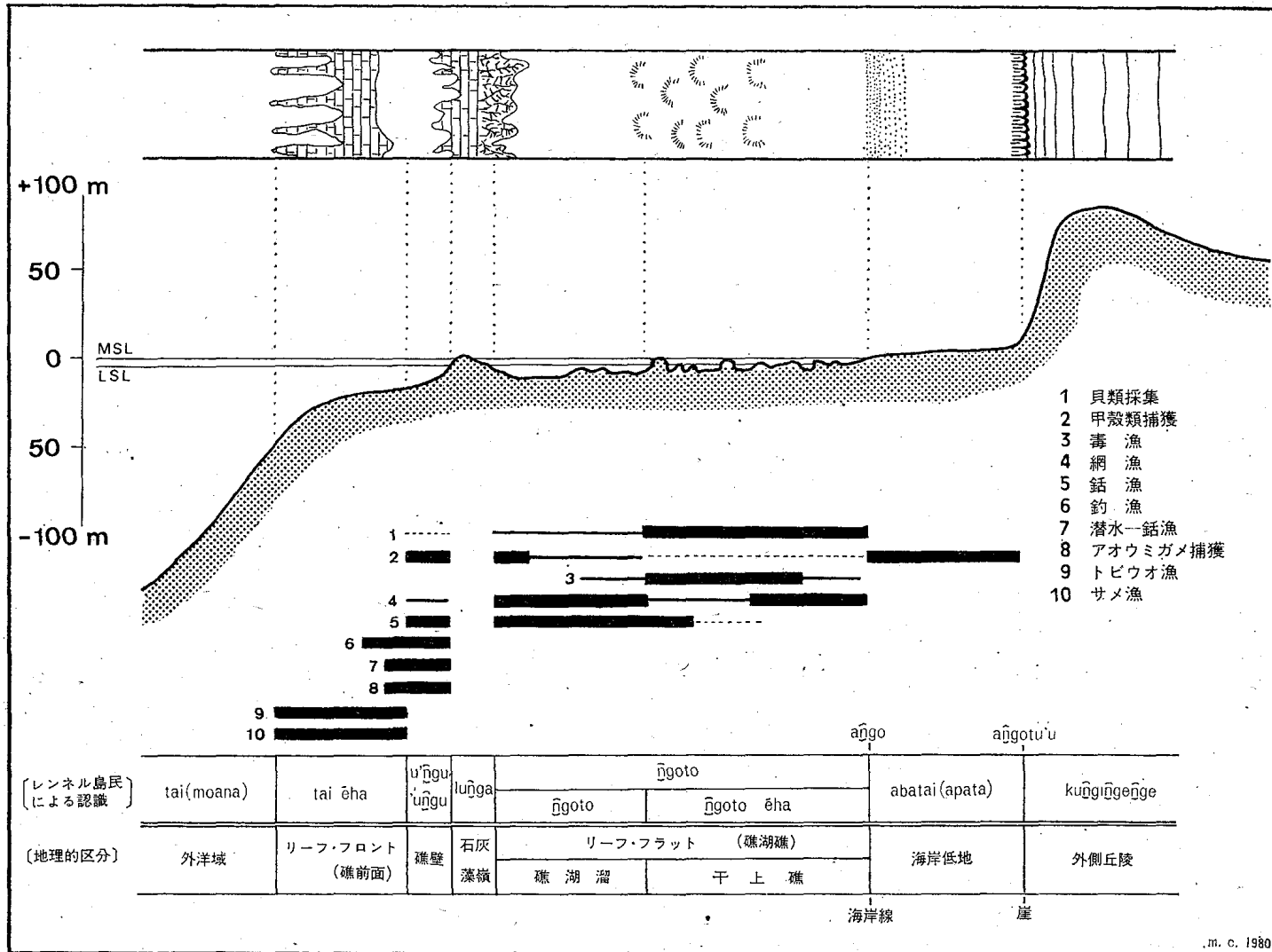


図3 裾礁の微地形配列と漁法

崖の基部。島の地下に浸透した雨水は、この部分で海水面に流出する。そのためにここに石灰岩洞穴が形成されたり、また波浪による侵蝕崖が残されたりしている。このような洞穴や岩陰は、漁のためのキャンプに利用されてをり、考古学的な遺跡としても、その古い居住を知ることができる。(LC-1, LC-2, LC-3, LC-4の各遺跡。われわれが発掘をおこなった、最も古い年代を得た遺跡もそのひとつである。)

(3) abatai (apata)

海岸のところどころに形成されたテラスないし低地。abataiは、部分的に耕作されている土地を指す。今日、多くはココヤシ林として利用されており、カヌーの陸上げ、漁撈の基地として重要である。apataは農地として利用されない土地を指すが、多くはabataiより面積がせまく、経済価値が劣る。Kanggava湾とLugugi湾に面していくつかのabataiがある。LabagguとKanggavaはそのうちで最も広い。カヌーを陸上げさせることのできる砂浜の海岸を多くにoneと呼ぶ。

(4) a(n)go

海岸線。陸地が海域に接する岸線を指す。

(5) (n)goto

リーフ・フラット(礁湖礁)。リーフの内側のラグーン全体を指す。岸線から一〇〇〜二五〇mの間は、水深〇・七〜一・〇mの平坦な地形で、殆どが死滅したサンゴによって形成されている。全体として沖側に傾斜しているが、島民は岸に近い、比較的浅いところを(n)goto éhaと呼び、いわゆる干上り礁を区分している。各所に空洞がみられ、低潮位の時にはタイド・プールを現出させる。リーフ・フラット内には海底が砂地におおわれ、水深が一〜二m位のいわゆる礁湖溜がみられる。後で述べるように、このゾーンは貝類の採集と岩礁魚の捕獲に重要な舞台である。

(6) lu(n)ga

石灰藻嶺。岸線から一〇〇〜二五〇m、リーフ・フラットを距て卓越風向側には石灰藻嶺が発達し、リーフの内側と外洋とをわけている。低潮位時には海面上に露頭するが、ところどころに切れ目があって、外洋の波をリーフの内側へ送り込んでいる。カヌーはそこを抜けて通行が可能である。この *Iu(n)ga* は島民にとって漁撈のいわば前哨基地であるともいえる。この外側は数メートルで急に深さを増し、外洋に続いている。

(7) *'u(n)gu'u(n)gu*

礁壁。リーフの沖側先端の壁にあたる部分。幾条にも現生サンゴが外洋に向かって張り出し、いわゆる縁脚―縁溝系を発達させている。水深は七〜一二m位。海底地形はこの先から傾斜を増す。

(8) *tai éha*

礁前面。リーフから沖側五〇〜八〇mのところまで水深二五mを越える。航空写真の判読によれば、この部分にはサンゴの生育はみられず底質は砂地状を呈している。いわゆるリーフ・フロント（礁前面）にあたると思われる。

(9) *tai (moana)*

外洋域。島民は外洋域について、波向やうねりの様子などによって細かく区分するなど、特別のターミノロジーをもたない。

以上、島民によって沿岸地形は、九ないし十のゾーンに識別されている。それらは、海岸線から沖合に向けて微妙に変化するサンゴ礁地形特有の带状配列に、きわめてよく対応しており、彼らがその自然環境に適確な認識をもっていることを示めている。

造礁サンゴの形成は、温度や塩分濃度、干出時間などの諸条件に関連するが、それらは波浪の方向や強さによって決まるために、貿易風の卓越風向に面する風上側と風下側では、その発達に幾分相違がある。このように風波の作用が海岸の地形や底質など、微小環境の带状配列を多様な形で用意する。そこにみられる一連の生態系は、動植物に変化に富んだ生

息場所を与え、様々な生物群集を成り立たせている。島民による沿岸域の詳細な認識は、そこに展開される漁撈活動の戦略的表現にほかならない。この点をめぐって、考察をすすめる。

V 魚種の民俗分類

サンゴ礁は地球上で最も多くの生物種を包み込んだ生態系のひとつである。ラグーンのサンゴ塊のまわりに群がる色とりどりの小魚。白波のくだける礁縁の深みに泳ぐ色鮮やかな大形の魚、大小さまざまな貝類、ウニ、エビ。それらはサンゴ礁の生物社会の豊かさの象徴であろう。レンネルの魚類と無脊椎動物は大部分インド太平洋動物相に属し、島の周囲の魚種だけでも、おそらく四〇〇から五〇〇に達するであろう。そこでまず、レンネル島民がこれらの生物をどのように分類しているだろうか。

島民による動物分類の基準は、近代科学としての生物学のそれと異なることはいうまでもない。レンネル島民の概念には「動物」に対応するものがない。すべての生物は「魚」(ika)あるいは「貝」(kauri)。「貝」(hatu 'atua)、「陸上の動物」(manu)の三つに区分される。「魚」には魚類の他にクジラ、イルカ、ウミガメが含まれ、「貝」はさまざまな貝類とウニの類を総称する。また「陸上の動物」には鳥と昆虫が含まれる。これら三つの区別ははっきりしているが、イセエビだけは魚のカテゴリにも陸上動物のカテゴリにも入れられる。魚をあらわす語 ika は、どちらかといえば古語で、古老の語るチャントの中ではこれが用いられている。この ika は西ポリネシアのトンガやウヴェアに今日なお残るプロト・ポリネシア語の語彙であって、トンガおよびウヴェア語では ika、ハワイやサモア語では i'a などとなる。他方 kauri は日常話されることばで、それはまた、石蒸焼をおこなうために魚をバナナの葉などでくるんだ包みを意味する。

さて、魚 (ika, kauri) は彼らの民俗分類において、いくつかのグループから成り立っている。すなわち、(1) 針をもった魚 (ika hai hoto) アカエイ、ハリセンボン、テングハギなど。(2) 這いまわる魚 (ika seseke) ウナギ、ウミヘビ、タ

コなど。(3)人間に噛みつく魚あるいは歯のある魚(ika hai niho) サメ、カマス、ウミヘビなど。(4)叩き太鼓のように平らな魚(ika papa) アジ、ブダイなど。(5)小さな魚(ika ighatighi) イットウダイ、ニザダイ、チョウチョウオ、イスズミなど。(6)大きな魚(ika tu'utu'u) クジラ、イルカ、カツオ、マグロ、マカジキなど。(7)人間のような魚(pe(n)gea) ウミガメ、クジラ、イルカなど。(8)細長く胴の丸い魚(ika saukatoa) クジラ、イルカ、サバ (Lubi) など。(9)平らに羽をひろげた魚(ika (n)gapa(n)gapa) アカエイ、トビエイ、カレイなど。(10)ウロコをもつ魚(ika hai 'unahi) ブダイ、カマス、トビウオ、ニザダイなど。(11)ウロコをもたない魚(ika hai kongoa) クジラ、イルカ、サメ、アカエイ、テングハギなど。(12)背びれと腹びれのある魚(ika (n)ganga) サメ、クジラ、イルカ、メカジキ、マカジキなど。(13)扇(ココヤシの葉など)でつくられたもの(i(n)gi)の形をした尾をもつ小さい魚(ika ighaatingi (n)gau pa(n)galea) フエダイ(タルシ)、ニザダイなど。(14)又状の尾をもつ魚(siku na(n)gai (n)gua) アジ、カツオ、マグロなど。(15)薄い皮膚をもつ魚(ika sa(n)gogha) メカジキ、サバ、マグロなど。(16)ナマコの類((n)gongi) などである。以上のうちクジラとイルカはともに tah(n)ga'a で区別していない。ともに人間によく似た魚 pe(n)gea とされるのは、解体した時に沢山の血が流れるからだという。

これら十六の魚の分類をみると、大きさによるもの、体形によるもの、皮膚の特長によるもの、ひれと尾の形によるものなど、その分類基準はさまざまであって、統一的なものがあるようには思えない。むしろ興味深いのは、ひとつひとつの魚についてたずねれば答えが返ってはくるものの、それらが食用であるか、ないかを基準にしたカテゴリーが存在しないことである。また生息場所による分類もなく、あざやかな色彩による分類もないことはどのように理解すべきであろうか。それでは島民が実際に食用に供する魚種は何か。この調査は実は非常に困難である。それはきわめて多様であるばかりでなく、同一種でも捕獲される場所によって、また、時期によって食用にしたり、しなかったりする。宗教的、制度的タブーにもとづく理由ばかりでなく、岩礁魚の中にはたとえ同一種であっても生息場所によって有毒なものと、そうでな

いものがある。また季節によってそのようなことが云われている場合もある。以下、島民が食用魚として重視し、捕獲する主なものを挙げれば次の通りである。

(レンネル名)

maleu	チヨウチヨウウオ	<i>Chaetodontidae, Chaetodon ephippium Cuvier</i>
ngaungauhan	チヨウチヨウウオ	<i>Chaetodontidae, Amisochaetodon unimaculatus (Bloch)</i>
upipi	チヨウチヨウウオ	<i>Chaetodontidae, Conochaetodon triangulum (Cuvier)</i>
moamo	ハコフグ	<i>Ostracion solorensis Bleeker</i>
tautu hotohoto	ハリセンボン	<i>Diodontidae, Diodon maculatus L.</i>
sumu	モンガラカワハギ	<i>Abalistes stellaris (Bloch & Schneider)</i>
ngaea	ベラ	<i>Labridae</i>
muumuutai	スズメダイ	<i>Pomacentridae, Pomacentrus cyanomos Bleeker</i>
pongo	ニザダイ	<i>Acanthuridae, Acanthurus maculiceps (Ahl)</i>
ume	ニザダイ	<i>Acanthurus sp. ?</i>
manini	ニザダイ	<i>Acanthurus triostegus (L.)</i>
ma'ito	ニザダイ	<i>Acanthurus baricul Lesson</i>
api	ニザダイ	<i>Acanthurus leucopareius Jenkins</i>
angongo	ニザダイ	? <i>Acanthurus lineatus (L.)</i>
'ahingamea	ニザダイ	<i>Acanthurus olivaceus Bloch & Schneider</i>
'akangeko	ニザダイ(テンハダキ)	<i>Naso unicornis</i>

'uhu	ブダイ	<i>Scaridae, Xanothon sordidus (Forsk.)</i>
ungabi	ブダイ	<i>Xanothon venosus (Valenciennes)</i>
menga	ブダイ	<i>Xanothon oktodon (Bleeker)</i>
takapa	フエダイ	<i>Lutjanidae, Lutjanus vaigiensis (Quoy & Gaimard)</i>
hangamea	フエダイ	<i>Lutjanus bohar (Forsk.)</i>
lakonga	フエダイ	<i>Lutjanus fulviflamma (Forsk.)</i>
mangau	イットウダイ	<i>Holocentridae, Holocentrum diadema Lacépède</i>
kaalao	イットウダイ	<i>Ostichthys parvidens (Cuvier)</i>
mangibu	イスズミ	<i>Kyphosidae, Kyphosus cineraceus (Forsk.)</i>
Sipa	トビウオ	<i>Exocoetidae, Hirundichtys oxycephalus (Bleeker)</i>
apa	トビウオ	?
Sasabe	トビウオ	<i>Cybselurus atrisignis (Jenkins)</i>
malolo	トビウオ	?
hu'aika	アジ	<i>Caranx melampygus ? (Cuvier)</i>
ngagha	カタクチイワシ	<i>Engraulidae, Schutengraulis hamiltoni (Gray)</i>
mangoo	サメ	<i>Lamniformes</i>

(Gosline, W. A. and Brock, V. E. "Handbook of Hawaiian Fishes" Honolulu 1976. Titcomb, M. "Native Use of Fish in Hawaii" Honolulu 1977)

以上、主な食用魚をみると、その大部分はやはり、リーフの周辺に生息する岩礁魚である。注目されるのは、さきに表示

めした魚類の民俗分類において、かなりよく観察されている外洋性の魚種が、日常的な食用魚として、あまり多くは、リストに上ってこないことである。カツオやマグロなどの大形回遊魚やイルカ、さらにはクジラなどにも島民の関心は決して低くはないが、それらに対する適切な漁法を開発していないということであろう。

VI 漁撈活動

狩猟と採集を区別するのと同じように、漁撈と採集の間に一線を劃することはむづかしい。ここでは生計活動の場として海洋を利用することをすべて漁撈活動と考えたい。

(1) abatai (apata) の漁撈

レンネルにおける沿岸の漁撈活動は、潮上帯の砂浜 (abatai または apata) からはじまる。島民の日常の蛋白源として最も一般的なヤシガニ *Birgus latro* L. (akui, akui saoa) は、日昼、ココヤシの実を半分にしたものを棒で砂浜にさしこんでおき、晩にココヤシの葉を乾燥させてつくったタイマツの明りで、そこに集まってくるものを手づかみする。また、成体は陸上生活をするが、幼生の孵化は海中でおこなうというイワガニ科のアカテガニ *Sesarma* あるいはオオガニ *Cardisoma* (a(n)go) は十一月から一月にかけて、砂浜で捕える。島民はこの期間をとくに a(n)go natakiki と呼び、タロとバナナのある季節を象徴させている。

(2) (n)goto の漁撈

さて、沿岸水域における採集活動の主要舞台は、リーフ・フラット (礁湖礁) ことに後方の干上礁 ((n)goto eha) であろう。岩礁性の魚類のほかに軟体動物、棘皮動物、節足動物などを対象とし、年間を通して個人単位ないし家族単位、あるいは数名より成る一時的な集団を単位としておこなわれる。ほとんどの場合、女性と子供たちの仕事である。活動時間は大潮期間の干潮時に集中し、高潮位海岸線と低潮位線の間をかなりまんべんなく徒渉しながら、手や棒を使って採集

する。その手順はしばしばルーティン化しているようであって、一回の活動時間は、一時間位、一人の漁獲量は二kg程度である。潮間帯上縁の岩礁につくタマキビ、真潮間帯のアマガイやツタノハガイ、リーフ・フラットの砂地に生息する各種の二枚貝、死んだ礁面の小さい穴に着座し、そこに足糸をつけて定着しているヒメジャコ、礁湖溜や石灰藻嶺附近のリーフ・フラットに付着しているクロチョウガイ、砂地の枝サンゴの茂みの中に座るようにすむシャコガイなどがよく採集される。ニシキウズは小形のものにはリーフ・フラットにも生息しているが、大形のものにはリーフの外縁部に出なければ採れない。多くの貝類は食料として採集された後、斧、スクレーパー、ハンマー、などの道具として用いられる。オオジャコ、ヒレジャコ、シャゴウなどはかつて利器の材料として、石材を得られないサンゴ礁の環境においてとくに重要であった。主に採集される軟体動物は次の通りである。

(レンネル名)

sisi	アマガイ	<i>Nerita sp.</i>
polopolo	ヒラシイノミガイ	<i>Pterocera sp.</i>
(n)ga(n)gi(n)gasa	ツタノハガイ	<i>Ptella sp.</i>
pungu	ニシキウズガイ	<i>Trochus sp.</i>
kan	イモガイ	<i>Conus sp.</i>
angingi	サザエ	<i>Turbo sp.</i>
punge	タカラガイ	<i>Cypraea sp.</i>
langinga	オオジャコ	<i>Tridacna gigas (L.)</i>
Takamou	ヒレジャコ	<i>Tridacna (Flodacna) squamosa Lamarck</i>
hasua	シャゴウ	<i>Hippopus hippopus (L.)</i>

レンネル島における漁撈活動 (上)

?	シラナシ	<i>Tridacna (Vulgodacna) maxima</i>
?	ヒメジャコ	<i>Tridacna (Chametetrachea) crocea Lamarck</i>
takuku	ヒザラガイ	<i>Chiton sp.</i>
nguheke	イカ	<i>Decapoda</i>
heke	タコ	<i>Octopus sp.</i>

そのほか棘皮動物ではクロナマコ *Holothuria* (レンネル名 *mannu*) を採集する。

リーフ・フラットの魚類は比較的小形のものが多いが、きわめて多様な岩礁魚が生息している。干潮時に現出するタイド・プールには、スズメダイ、シマハギ、ハゼなど小形の魚とウニをみることできる。沖に向って少しずつ傾斜したリーフ・フラッドの中程をすぎたあたりに密生するサンゴの株の周囲にはベラ、ブダイ、イットウダイ、チョウウオ、マフグ、ハコフグ、ハリセンボン、スズメダイ、モンガラカワハギ、シマハギが生活している。ニザダイは通常、礁壁附近に群をつくって泳いでいるが、タイド・プールなどに乗りこんでくるものを捕獲する。ブダイも体長三〇cm以下のものはリーフ・フラットに上ってきて追い込み漁の主要な対象になる。ハリセンボンはフグの仲間であるが毒があるわけではないので食用にされる。

リーフ・フラットでおこなわれる最も特徴的な漁法は毒漁 (*punu* あるいは *sunaghi*) であろう。野生の *Iuba* とよぶマメ科ドクフジ属 *Derris heterophylla* のつるを五〇cm位に切って十数本を束にし、その端を叩きつぶして汁を出し、これをタイド・プールや浅瀬、割れ目などに浸す。水中に毒が滲み出して魚を麻痺させ、水面に浮んできたところをすくい網、あるいは手でつかみとる。また、網で囲んでから仕掛ける場合もある。リーフ・フラットに生息する魚のすべてが対象となるが、体長三〇cm以下のものが殆どである。これは女性に許された唯一の漁法で、個人ないし家族単位で、昼間おこなわれる。

リーフ・フラットの地形を利用したもうひとつの漁法は、追い込み漁 (gaho aba) である。これは約50mの間隔をおいて並んだ二隻のカナーの間に、細長い網 *kupenga tagu* (横中60m、縦中1・5m、約2cm四方の網目) をおろし、U字形にひろげる。五人位の男達が海に入り、一列にならんで声をあげながら魚を威嚇して網の方へ追い込む。追込みが進むと、二隻のカナーの間隔をせばめ、網を少しづつ巻きとりながら、一定の岩礁区域内に寄せていく。別の方法では、網の一端を岩礁に縛りつけて固定して魚を追いつく場合もある。追いつく距離は地形によって異なるが、数10mから100m位になる。網に入った魚は鉗、すくい網、手づかみなどで捕獲する。この漁法では、網に入ってくる魚はすべて捕獲の対象になる。活動は日中、男たちによって集団的におこなわれる。地引網はサンゴ礁の海底地形には適さないので、全くおこなわれていない。

特定の魚を対象にした網漁としては、ニザダイ (*pungo*) の群をとらえる時に、五〜六mの長さの網 (*bugho*) を二隻のカナーの間で引く、いわゆる引網が用いられる。これは網の目が *kupenga tagu* より大きいので、網の目を通り抜けようとする魚をとらえる刺網としても用いられる。以上の網漁はすべて日中におこなわれる。

(3) *Iu(n)ga-u(n)gu'u(n)gu* の漁撈

石灰藻嶺にはつねに高い波が打ち寄せ白波が砕けている。礁壁はイシサンゴやウミトサカが美しく茂り、ここに様々な魚類が集まってくる。藻類を食べる草食魚、それを追う肉食魚、そこへサメも現われる。石灰藻などの藻類を主食とし、島民が岩礁魚のうちで最も重視するニザダイは礁壁に沿って、水深5mほどのところを群をつくって泳ぐ。体長30cm位のものが多い。非常に多くの種を含んでいる。すでにのべたように引網によってとるが、海面近くにあがってくるものをラケットの形をした小形の手網 (*kupenga*) で石灰藻嶺を足場にすくう場合もある。かつてニザダイは最高神 *Tehainga'atua* からの贈りものと考えられ、漁があった時には、かならず神に捧げられたという。

黄、青、黒と交互に細い縞模様をもつ美しいニシキニザは外洋の海水が流れ込む水の流れの速いリーフの切れ目のとこ

ろにあらわれる。アイゴも成魚は藻食性である。これも網か追込みによってとる。この魚はひれの棘に毒腺があつて、これに刺れると激しく痛むために、島民は捕獲に際して細心の注意を払う。ブダイもニザダイと同様、多くの種を含んでいる。リーフ・フラットの中にも生息しているが、大形のものには石灰藻嶺近くの海底にすむ。オウムのように発達した独特の歯をもち、サンゴ礁にすむ小動物を噛む。咽頭骨があり、これに咽頭をつけているが、それは遺跡から出土する骨格の同定に手がかりを与えてくれる。体長は種によって違うが、捕獲されるものは三〇cm～五〇cm位のものが多い。昼行性であるので日昼おこなわれる追い込み漁の主な対象となる。イセエビ *Palinurus penicillatus* (tapatapa) は昼間は石灰藻嶺の無数の穴の中に入っていて、夜間に行動するために、漁は夜間にかぎられる。捕獲には柄の短い手網 (kau matua) を用い、しばしば、潜水によって獲る。二人の成人男子が夜間リーフを五時間位歩いて七～一〇kg位の漁獲をあげる。同様にパイプウニも波の荒い石灰藻嶺の外側の穴の中に附着している。このウニも夜間に動くので昼間の採集はむづかしいが、夜間に簡単に集めることができるという。

石灰藻嶺を足場にしておこなわれる漁法の代表的なものは、釣り漁と銛漁、それに潜り漁である。

釣り漁 (sisii) はほとんど手釣りで、個人単位におこなわれる。外洋性の魚や礁縁の肉食魚を対象とするが、魚種はきわめて限定されている。すなわちベラ (n)gagha(n)gaha)、フエダイ (hangamea)、アジ (hu'auka)、イットウダイ (kaloa) の四種である。このうちフエダイは体長三〇cm位である。釣り漁にはカヌーに乗っておこなう aho'a(n)gu(n)ga と石灰藻嶺の上を歩きながらおこなう hakamantiga の区別がある。カヌーからおこなわれる釣り漁のうちで、もっとも精巧なものは hatua(n)gi と呼ばれる手法である。それは目的とする適確な位置に針が達するまで、釣針につけた餌を保護するために、それを葉でおおい ((n)gaukei)、意とする水深のとおおった葉を開かせる。餌が放出されて対象魚を呼び、針にのこった餌でつり上げる。このようにして対象魚の生息位置に合わせて、水深に注意がはられる。カヌーによる釣り漁はほとんど日中におこなわれる。石灰藻嶺からの釣り漁は、日中、夜間ともにおこなわれるが、そのうちで

興味深いのは、*haamoekuka* と呼ばれるものである。これは短い竿を礁の上に立てておいて、餌をつけた針 (*uka, ghau*) を泳ぎ手がリーフの外へ置いてくる。釣針が目的の個所にとどくと、再び泳ぎ戻って対象魚がかかるのを待つ。石灰藻嶺の上を歩く時には、するどいサンゴ礁から足を保護するために樹皮で作ったサンダルのような履物 (*taka bae*) が用いられる。釣針はかつては亀甲、釣糸 (*uka*) は植物の繊維 (*Ba(n)gairu, boitu*) でつくられたが、今日ではほとんど金属製の針とナイロン糸が用いられるようになっている。

銛はリーフ・フラットでの各種の漁法にも用いられるが、礁壁部での潜水には欠くことができない。礁壁に沿って深みに水中めがねを使って潜り、オーバー・ハングの下にかくれている魚を銛で突く。このような漁法を *beobengo* と呼ぶ。銛の先端 (*tao*) は、かつては人骨や、堅い木をけずりだして作った鉤のないものが用いられたが、現在は、三本の針のついた鉄製のものが使われている。

アオウミガメ (*honu*) の捕獲も、主にこのゾーンでおこなわれる。その肉はきわめて美味なものとされ、栄養的価値が高いだけではなく、甲は釣針や、耳飾の製作に材料として用いられる。捕獲は浮上したところをカヌーで接近し、銛で頸を突く。古老の記憶の中では、昔は捕獲されることもしばしばであったが、今日では見かけることが殆どなくなったという。これは乱獲によるものと思われるがこのような資源の枯渇は、ウミガメだけではなく、島の各資源について指摘できる。食料資源としてばかりでなく、道具の材料としても重要なシャコガイ超科のオオジャコは、その殻が年に1cm位しか大きくならないといわれ、今日ではリーフ・フロントの深みにさえ見付けることが困難であるという。われわれの考古学的発掘によっても、下層に多いオオジャコの量は、上層に移るにしたがって減少することが確認されている。概して貝類の採集は収獲が安定しているだけに、とりわけ過剰開発による枯渇の可能性がつねに存在するわけである。宗教儀礼のシステムやタブーのシステムによって、特定の種が乱獲から保護されていたことは、いくつかの事例によって指摘できる。今日もなお、「黒い魚」(何の魚を指すか未確認) は首長 (*hakahua*) が死んだ時にしか捕ることができないというタブー

があり、キリスト教の宗派によっても、いくつかの食資源に対するタブーが設けられているのは、理由づけはともかく、結果的には資源保護のシステムとして作用していることは疑いない。このような過剰利用による資源量の長期的変化は、経済的、人口的要因と関連しているので、別に検討を加えることにしたい。微妙な生態学的均衡の上に成立しているサンゴ礁環境に、ヒトがおよぼす影響を考古学的時間尺の中で読みとることがある程度可能である。

(4) tai éha の漁撈

リーフ・フロント（礁前面）でおこなわれる漁法はトビウオ漁とサメ漁の二つに限られる。そしてこの二つの漁法はともにも九月から十一月にかけてのいわゆる「魚の季節」(ta'u ika) に集中的におこなわれ、強い季節性をもっている。島民にとってそれらは日常生活の単調さを破る興奮に満ちた行事でもある。

トビウオ漁 (sasabe) 東寄りの安定した貿易風が吹きはじめると人々はカヌーの準備にとりかかる。八月の終わりから九月に入ると海水面に温い層ができ、トビウオがそれによって接近する。トビウオ漁は、他の漁法に比べてはるかに風向に支配される。そのために島民は「よい」風と「わるい」風をすどく見分ける。「よい」風は tonga tu'u (東南風) と (n)gua tu'u (北東風) であるが、「わるい」風は tonga (n)ga(n)go (南南東風) で、それが吹くと「冷たい水がやってきてトビウオを岸からたち退かせてしまう」という。「よい」風の吹く、月のない夜、いく分気温が高く、波のおだやかな天候が選ばれる。沢山の篝火が暗闇の海面にゆらめき、勇壮なトビウオ漁がはじまる。胴体の全長八mの大型アウトリガー・カヌー baka éha 一隻と、全長四m二〇の小型のアウトリガー・カヌー (hua) 三隻が一組になって漁場に向う。baka éha カヌーには、篝火にする乾燥させたココヤシの葉の束 ((n)gama) を積む。その束は長さ二m四〇、中間を絞って四つのふくらみを設けてある。それは点火した際に断続的に、しかも集中的に炎をあげるようにするためである。一回の出漁で、一組当り五本の束が用意される。baka éha カヌーは四人の男が漕ぎ一人の子供が種火をブリキ板の筒の中に入れて保持している。リーフに向う途中で、リーダーの男が舳先に坐して、呪文を長々と唱える。小形の三隻の hua

カヌーにはそれぞれ二人の男が乗っている。この一組のカヌーの配列には特別のルールが働いている。例えば *baka éha* カヌーの前方は *hua* カヌーにとってタブーになってをり、*baka éha* カヌーの乗り手たちの坐る位置も決まっている。後方の二人が楢円形の浅い網を張った全長三mの網 *kupenga hangahanga* を持ち、その前方の男が全長一m六〇の短い網 *kupenga kaumatu'a* を持ってかまえる。最前方に乗る男が、種火を用意する少年を助手に、*(n)gana* の篝火を操作する。他の小型の *hua* カヌーは *kupenga kaumatu'a* 各一本を備えるだけで篝火をたくことはできない。漁はリーフの外側、リーフ・フロントの水深一〇〜二五m位のところでおこなわれる。リーダーの合図で、*(n)gana* が点火される。篝火が燃えあがると、高きかかげられた焰が水面を照らしだし、その光に呼び出されるように銀色のトビウオが空中に飛び上ってくる。リーダーは声をあげながらカヌーの舷側を網の柄で叩く。トビウオが群をなして飛ぶようになった時を見計らって、いっせいに水面上でトビウオをすくい上げる。一回目の篝火が消えると、カヌーは約二〇〇mほどリーフに沿って移動し、再び火をつける。同じ作業が何度かくりかえされ、カヌーを出してから約三時間で終了する。かなり集中的な作業なので疲労感が大きい。海岸にキャンプしながら三日間から一週間もおこなうことがある。日中には、同じ海岸のリーフ・フラットで追い込み漁や網漁をおこない、昼夜組み合させた集中的な漁撈がつづけられる。

サメ漁 (*'agoha(n)ga*) || 現在はキリスト教の S・D・A 派が、サメの肉を食することを許さないので、殆どおこなわれていない。聞きとりによって知り得る伝統的なサメ漁はおよそつぎのようなものである。リーフの外側へカヌーを出し、*ghau (n)ga'akau* という軸長三〇〜四〇cmの大きな木製釣針の先に、餌にする魚を腹開きにして紐でしばり、カヌーから流す。男はカヌーの舷側をヤシ殻で叩いてサメを呼ぶ。サメが針に食いつくと、力一杯に引き寄せ、棍棒やパドルの先端で頭部を叩いて引きあげる。釣針は一本の木材から削り出されたもので、断面がやや扁平で、先端にアゴ(カエシ)をもたない。軸は真すぐで、上部の内側にノブがつく。釣針を釣糸(綱)につなぐハリスは丈夫な結索を軸に巻きつけ、上端に大きなループをつくりだしてある。サメは最も大量な蛋白源として重要であったばかりでなく、キリスト教化以前には

強く宗教的行動と結びついてきた。サメは最高神 *Tehainga'atua* からの特別な贈物と考えられていたからである。また社会的なレベルでは、サメ漁が、何程か男性の資格（男らしさ）を獲得する機会として機能しており、成長した若者はリーフの外へ小さなカヌーで乗り出し、何時間もサメが現われるのを待つ。この漁は日中おこなわれるのが普通である。

(5) *tai (moana)* の漁撈

島民がカヌーで外洋域に出ることはほとんどない。ソロモン諸島のメラネシア民族の経済的、儀礼的生活において顕著な役割を果すカツオは、ここでは重要性をもたない。トロリングなど積極的にカツオを獲る漁法もみられない。カツオの他にダツ、アカエイ、トビエイ、アジなど外洋性の魚類も食用として好まれるが、捕獲されることはまれである。また、島民は水平線上でクジラが潮を吹くのをみつけることがあるが捕獲を試みるようなことは決してない。クジラ、イルカはともに *tahōn)gā'a* と呼ばれ、*ika tu'utu'u*（大きな魚）のカテゴリーに入るが、両者の区別がない。リーフ内に入ってきて乗り上げたものを *Tehainga'atua* 神からの贈りもの (*tonu*) として捕獲するだけである。島民の外洋域に関するターミノロジは沿岸部に比べて、はるかに乏しく、きわめてラフな概念しかもたないといえる。

Ⅶ 漁法の時空間配置

レンネル島民の漁法を概観すると、それがサンゴ礁の海底地形や潮汐、魚族の行動型などの諸条件に巧みに対応したものであることが理解される。沿岸部における九〇にわたるゾーンの微少環境が、きわめて多様に開発されているといえるだろう。とりわけリーフの内側と外側とでは、活動空間にきわだった対照がみとめられる。すなわち、リーフの内側における漁法には、追込み漁や毒漁のように、多様な水族を一括して対象とするものがみられるのに対し、リーフの外側では特定の水族に対応して計画、設定された漁法が発達し、礁縁からリーフ・フロントにかけて、深さに従って立体的な開発がなされている。海面に近い表層部にはトビウオ漁のような回遊魚を対象とした漁法があり、海底棲の水族には釣り

漁や銛漁などの漁法が用意されている。

このような漁法にみられる礁生態系への適応は、空間的にだけでなく、時間的にもおこなわれている。サンゴ礁の水族は、その生息場所の構造が複雑で、餌となる小動物や海藻、プランクトンなどが多様であるために、実に多くの種が共存しているが、それは空間的ばかりでなく、活動時間によっても、食い分けや住み分けを達成させているからである。したがって、漁法も日周期、月周期、年周期変化のそれぞれと微妙に対応している。まず、レンネル島民の漁法は日昼の漁法 *tautai'ao* と夜間の漁法 *tautai poo* に分けられる。夜間に篝火をたいておこなわれるトビウオ漁は、魚の遊泳行動を巧みに利用したものであるし、銛漁も魚や節足動物の睡眠時間に応じた漁法であるといえる。また昼間のリーフ・フラットにおける漁撈も潮汐の干満のサイクルによって、活動時間を細かく規定されている。また、月周期変化は、夜間の漁撈活動のあり方を大きく規定する。トビウオ漁は新月の時におこなわれるが、これは月光が篝火の効果を弱めるためであるか。動物行動学的な説明が必要である。また大潮の時は、リーフ・フラットにおける採集活動の場を実際にひろげることになる。このように月周期は、その日に漁撈をおこなうかどうか。如何なる漁法、漁具を採用するかを決めるときに、島民が常に配慮しなければならぬ要因である。さらに年周期的変化はどうであろうか。年周期的変化は、主として風向と日照量、あるいは雨量によって漁期を規定する。「魚の季節」*ta'uika* も、基本的にはこれによって決定されている。ただし、それは漁撈活動の背後にある文化的、経済的、人口学的状況にもとずいて、他の生計活動との組み合わせによって選択がなされていることを見逃すわけにはいかない。

VIII 漁期と労働配分

特定の魚種に対して、特定の漁具が用意され、その仕事集団に社会組織上の重要な意味が設けられているのは、トビウオ漁とサメ漁だけである。しかし、貝類の採集や、銛突のように個人でおこなうものから、追込み漁など共同作業をと

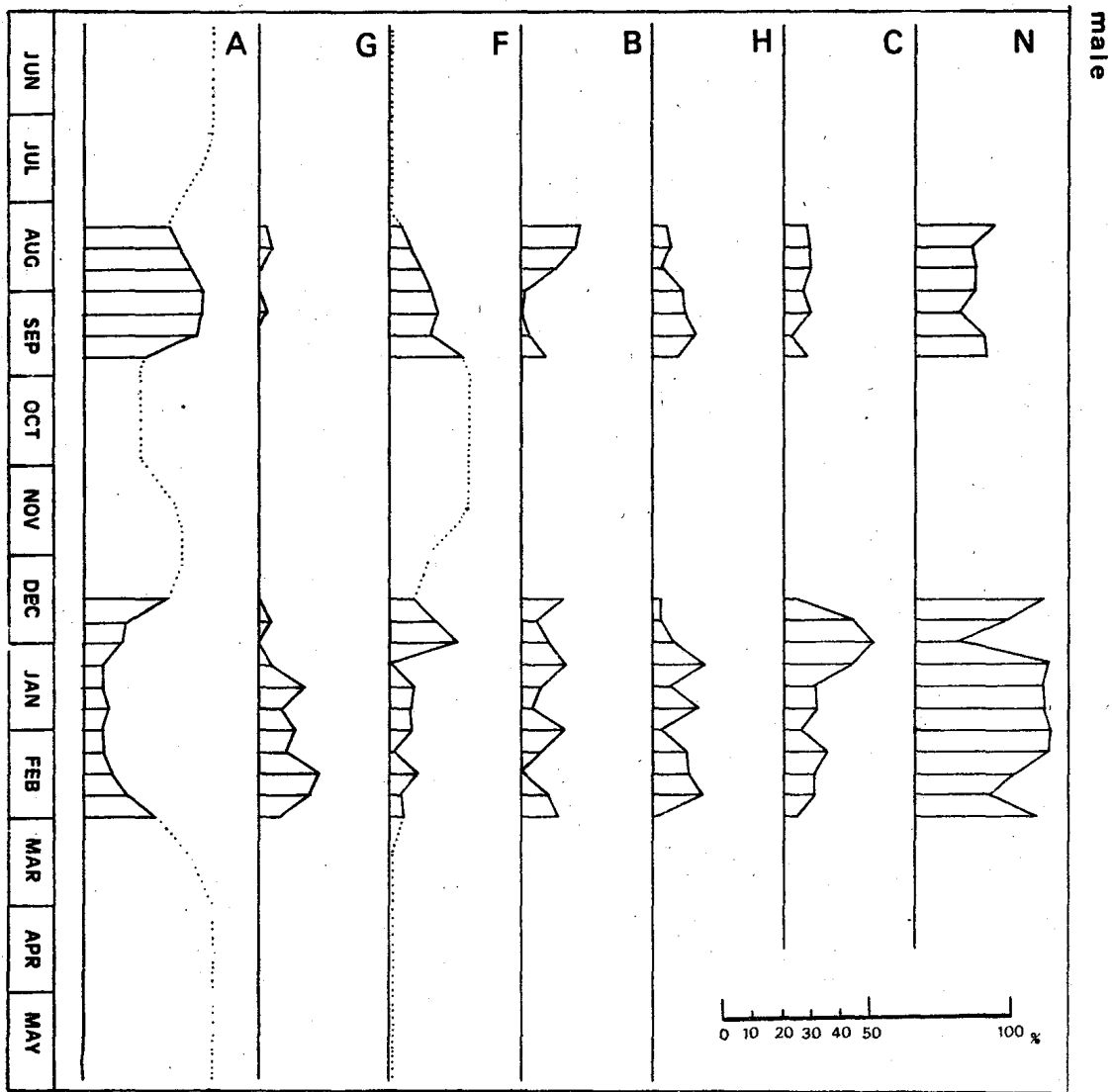


図4-a 年間労働配分(男性)
Hatangua, Nggonggona 男性 1973~1975

なうものまで、すべての漁撈活動は環境への適応戦略の中に統合されて、協同、交換、義務、個人の役割などを規定し、社会複合体を構成している。レンネル島民の社会において、専門的に特殊化した漁撈集団というようなものは存在しない。すべての集落 *manaha* は、漁撈活動の基地としてそれぞれ決まった海岸をもち、人々は時を定めて、*anga ki tai* と呼ぶ小径を通じて外側丘陵を越え、海岸に出る。そうした行動は各 *manaha* あるいは、リネエーシ集団において共通しており、本質的な差はない。生計活動における生産と消費は、各集落 *manaha* あるいはリネエーシ分岐ごとに、きわめて自律性を保っている点にレンネル社会の特徴がある。したがって、他の生計活動に対する漁撈活動の比重は、各集落

レンネル島における漁撈活動 (上)

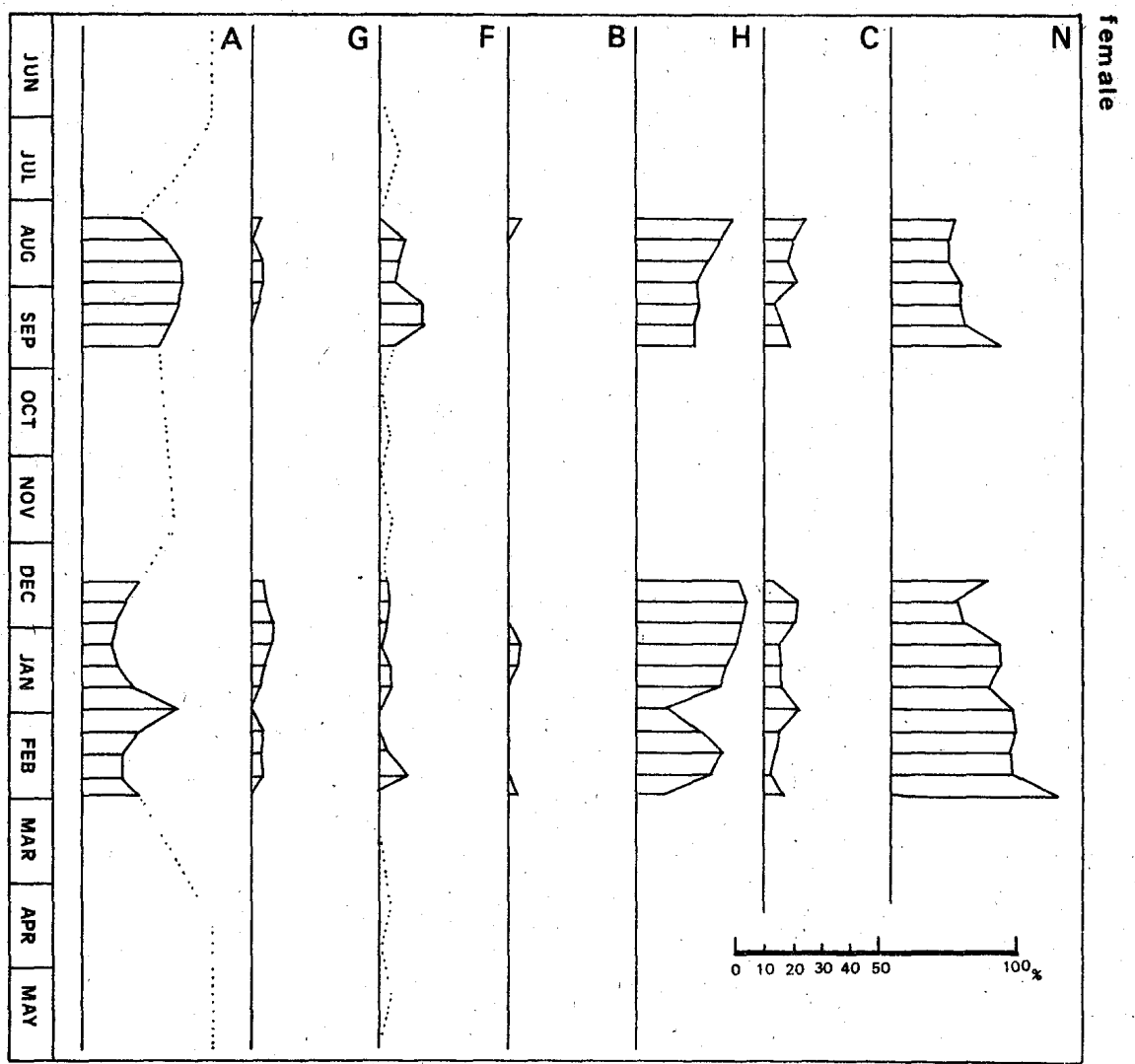


図4-b 年間労働配分(女性)
Hatangua, Nggonggona 女性 1973~1975

- A 農耕活動
- F 漁撈活動
- H 家事・彫刻・編み細工
- G 陸上での採集・狩猟
- B 家屋・カヌーなど建造
- C 教会など社会行動
- N 余暇

manaha にとって、かなり経済的、人口学的要因によってきまってくるのではないだろうか。いわば住民たちの労働の選択の問題であるといってもよい。そこで、つぎに最も典型的な二つの集落について、その労働の配分が、如何になされているかをみることにしよう。

図4a・bはレンネル島西部の内陸に位置する集落manahaである Hatangua と Nggonggona (人口は Hatangua が男性五二、女性四一、合計九三人。Nggonggona が男性一九、女性四〇、合計六九人。一九七五年のセンサスによる。この二つの manaha は、ともに島の西北岸 naone に漁場を共

有し、トビウオ漁や追い込み漁などの漁撈を協同しておこなう。一部では森林の伐採、開墾などにも協同作業をおこなう。婚姻紐帯もみとめられる。瀬良重夫「ソロモン諸島・レンネル島における人口とマナハについて」慶応義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報 No. 4 一九七九の住民についておこなった労働配分の調査結果である。二つの *manaha* の成人男女それぞれ一〇名について、一週間毎に消費した生計活動の時間を睡眠時間をのぞく仕事時間について調査し、仕事のカテゴリー別に、平均したものを百分率で表わした。その目的のひとつは労働の季節的配分を知ることである。仕事別の労働量は、それぞれの労働に参加した人数がまちまちであるので、直接計算することはできない。この表では週毎の男女別の仕事の集中割合をあらわしていると考えてよい。調査期間(図)の上で実線であらわされている部分)が限られていることと、これらの生計活動のすべてが天候に大きく依存していると考えられるので、一般化するには十分な配慮が必要である。データを欠く部分は、農耕と漁撈活動についてのみ、インフォーマントの聞きとりによって補足し、年間の変化を推定した。まず注意をひくのは、社会活動(O)や余暇(N)の割合が半分以上もあって、生計活動の時間は平均三分の一にしか達していないことである。しかしこれは他の焼畑農耕民の多くと比較して、けっしてバランスを欠いたものではない。家事、彫刻、編み細工のカテゴリー(H)には食物の調理、育児など家事一般の他に、唯一の現金収入源であるコプラの乾燥、出荷準備、工芸品の彫刻、パンダナスの編み袋の製作などが含まれる。この作業によって一人当たり年平均約二〇A \$(約六〇〇〇円)の収入がある。現金収入の増大に対する島民の意欲は高いが、現在のところ島内での経済生活に貨幣の有効性はきわめて乏しい。したがってここにみられる生計活動による生産は、かなり実質的なものとみなしてよいだろう。

さて、島民は農耕、漁撈、採集といった生計活動の季節的配分を夜空の星や、星座の位置によって知る。例えば、*nata-ngiki* (スバル星)、*pleiades* (プレイアデス)、*tongunga maui* (オリオン座の三つ星)、*tango* (シリウス)、*ngekee* (双子座)、その他何の星にあたるか理解できないが、*te ngaa o matangiki, tupu'a retinomanu, kingikaa, tangapongu tupa.*

などの星が収穫の星と呼ばれ、早朝にこれらの星が昇るか、下降するかに注意をはらいながら、ヤムの収穫の時期をはかる。ヤムの植付けに入るのは、収穫の星である *matangiki* が早朝にあらわれるようになる時であるという。ただ、われわれの観察では、ヤムの植付の時期はそれに先立つ乾燥期間の続き具合によって、最終的には決められたようである。ヤムの栽培が季節的に固定しているのは湿度の年変化のためではないだろうか。東南貿易風の季節の終りごろ、焼畑に火を入れ、ヤムが植付けられる。つづくモンスーン季の雨と太陽の恵みを受け、再び貿易風が吹きはじめると頃に収穫する。バナナは通常、湿度の高い赤道無風期に植付けられ、二年後に収穫する。これに対してサツマイモとタロには季節性が全くない。植付けから三〜六ヶ月で収穫できる。こうした農作業のリズムは、われわれの得た労働の年間分布に認めることができる（Aの項）。農耕労働の占める高い割合はヤムの植付と収穫がおこなわれる四月から七月の間にみられる。しかしタロやサツマイモの栽培は年間を通しておこなわれるので、漁撈活動が集中する時期を除いて、農耕活動の割合は、一様に高い。ただ、七月〜八月と、一月〜二月に農耕労働の割合が減少するのは、この時期に作物の収穫が低下する、いわゆる欠乏期 (*ka(n)gaka(n)ga*) がくるからである。そのためにこの時期に野生植物を採集し、狩猟をおこなわなければならない（Gの項）。ただ七月〜八月の欠乏期における農耕活動の割合が、一月〜二月のそれより落ち込まないのは、この時期がヤムの植付期にあたっているためであろう。

農耕活動は伐採と火入れをのぞいて男女共通の作業であるために、その労働分布のパターンは、図にみるごとく、男女がほぼ類似している。これに対して漁撈活動は男女のパターンにかなりの相異がある（Fの項）。男性の活動が九月から十二月にかけて集中するのに比べ、女性の活動は断続的に年間通して連続している。これは、女性によっておこなわれるリーフ・フラットでの漁撈ないし採集活動が、月周期的変化に依存していて、ほとんど年周期的変化の影響を受けることが少ないためであると考えられる。男性の漁撈活動が集中する九月〜十二月はトビウオ漁が行なわれる時期である。このいわゆる漁期（「魚の季節」 *tau'ika*）は、風向、日照量、水温などの気象条件にもとづくトビウオの回遊の時期によっ

て、基本的に決定されており、対象魚種の生態からみて、実際には一年中可能な追い込み漁や銛漁などにも、その主要な活動の時期を与えているのである。最盛期には、休息日をのぞいて、十五才以上の男子の約五分の一が漁撈活動に参加している。この間の水揚量は一回の漁で一人当り全くの〇から五〇kgを越える場合があつて、さまざまであるが平均十五〜二十kgと推測される。

島民のこの期間の漁撈活動に対する関心はきわめて強い。海産物をもつ高い蛋白質とアミノ酸という栄養的価値が、人々を漁撈へかりたてることは間違いない。そして何より魚は島民にとって美味なものである。しかしカロリー収入の点からみれば、漁撈における労働と漁具製作などの基本的コストがその収益をかなり減少させていることを忘れてはなるまい。例えば男性の集中的な漁撈活動の時期に先立つ七、八月にトビウオ漁のためのカヌーを建造し、漁網を用意しなければならぬ(Bの項)。B項の八月における男性の労働は、ほとんどが漁撈のための準備に投入されている。このように男性によるトビウオ漁(おそらく、かつてはサメ漁も)が一年間の時の流れの中に漁期を設けることになるが、それはまた同じく季節性をもつヤムの農作業と関連して、その時期を明確に規定しているのである。こうして男性作業集団を中心とするトビウオ漁の興奮に満ちた労働が、かつては勇敢で、誇り高い遠洋航海者であつたことを島民に自覚させる唯一の機会を与えるのである。

図5は同じく Hatangua と Ngonggona 部落における年間の食料別の供給割合を示している。それは所要エネルギー源の供給割合を滞在期間中の観察を基準とし、インフォーマントから得た情報と生計活動の年間分布を考慮して推定したものである。海産物の供給が年間を通し、最大になる十月は、トビウオ漁が最も盛んにおこなわれる時期である。この時期の食料供給は、ほぼ完全な充足に達していると推定される。そこでこれを一〇〇%とすれば年間で余剰を生み出す時期は五月から六月にかけてのヤムの収穫期にあたる。この期間に約五%の余剰が推定されるが、それが伝統的なヤムイモ収穫祭(gapu)、今日ではいわゆる宴会(big kaikai)の贈答慣行を可能にしていると考えられる。これに対して、

レンネル島における漁撈活動
(上)

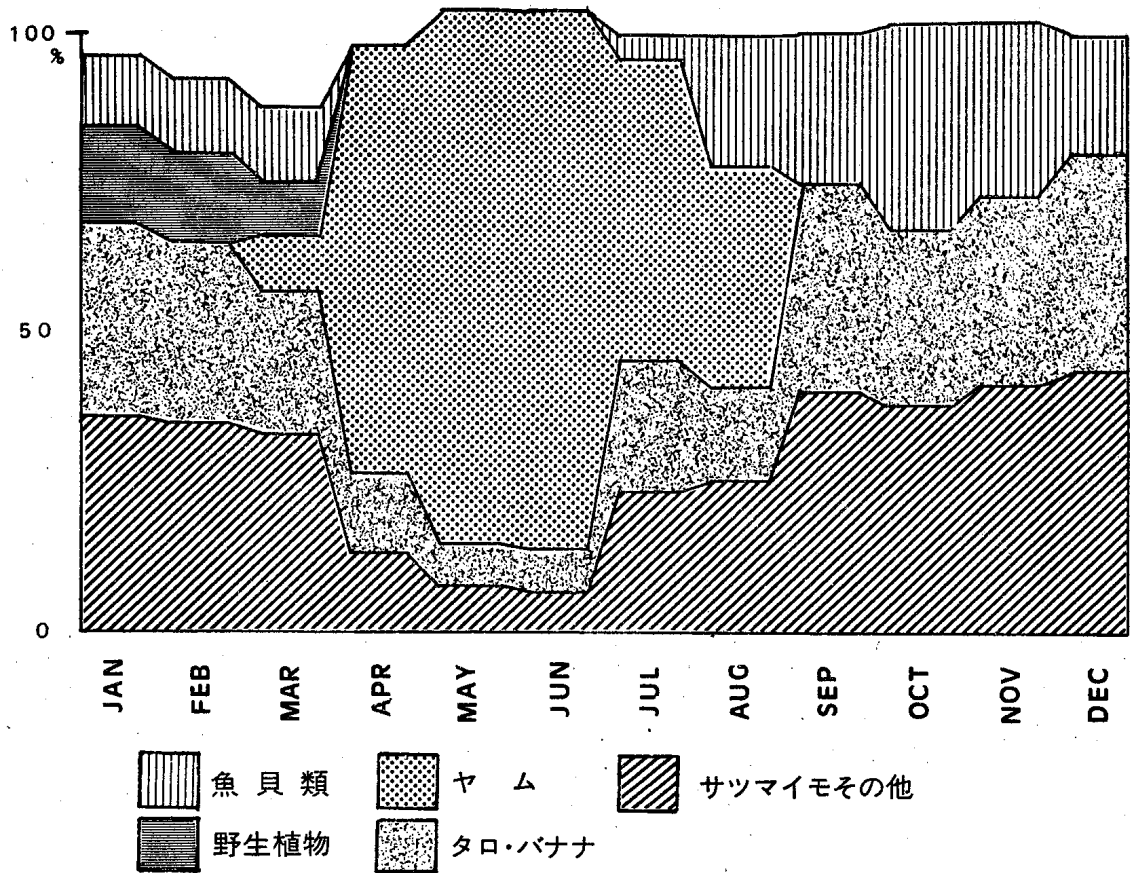


図5 年間食料供給

野生植物に依存しなければならぬ一月から三月のいわゆる欠乏期は、必要量に十〜十五%の不足をきたしていると思われる。島民の食生活には、主要食物の長期にわたる保存技術を欠いているために、この時期の食料供給は、しばしば深刻な状況になる。これは、島の人口の環境収容量に強い規制を与える要因のひとつになっていると考えられる。島民の間で野生食用植物に対する関心が高い理由は、そのためであって、陸上における採集活動は、今なお一定の短期間に重要性を失っていないのである。

(以下次号)